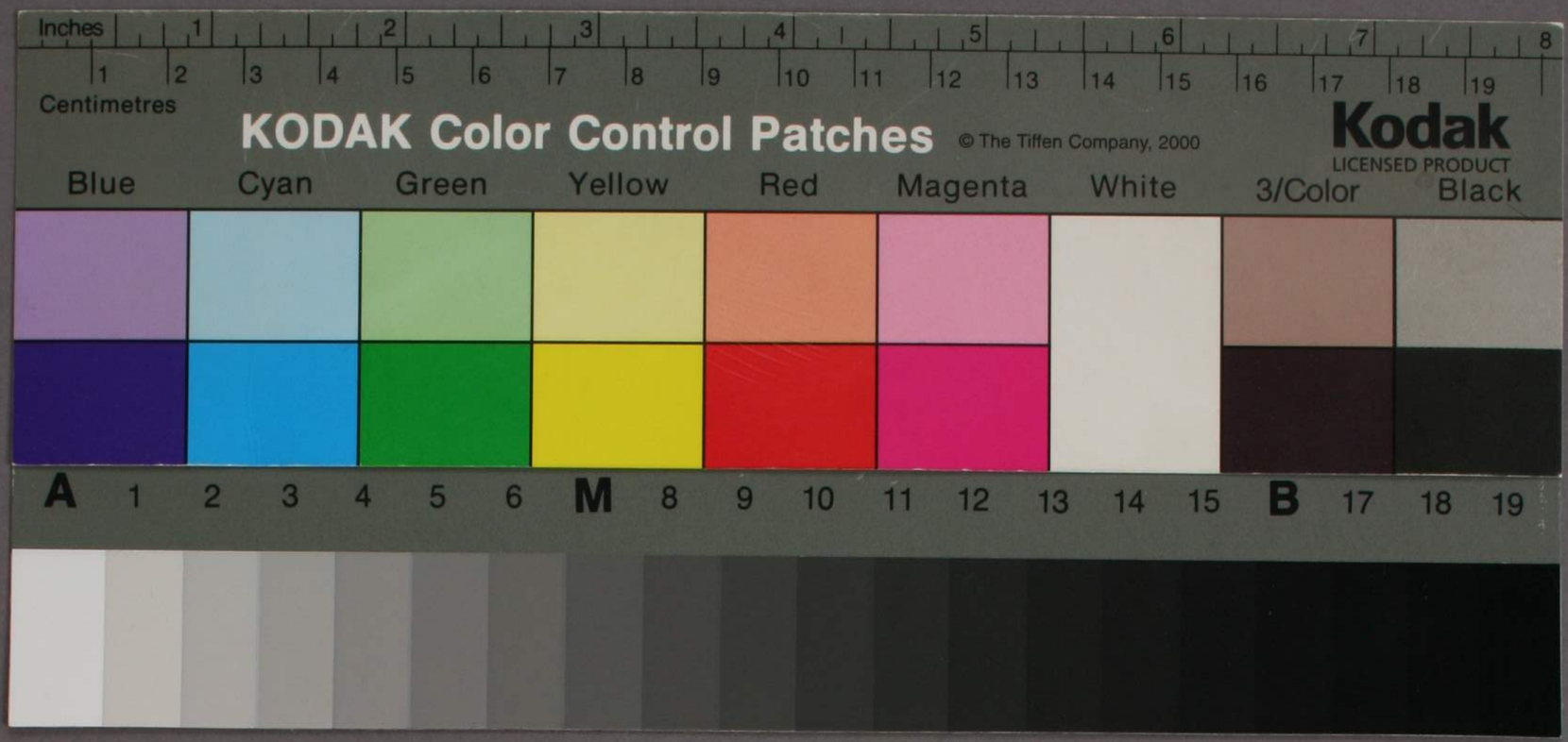

KUAIWA HEN.

PART III.

JAPANESE TEXT.

EXERCISES I—XIV.

洋学文庫
文庫8
C 763
1

平假名並片假名					
イ	ロ	ハ		ホ	ニ
い	ろ	は		へ	に
以	呂	波		部	仁
伊	路	婆		倍	保
之	露	者		巴	末
				遍	満
i	ro	ha		he	ni

41- 8589

ホ	ヘ	ト		チ	リ
ほ	へ	と		ち	り
保	邊	登	京	知	利
保	部	止	古	地	里
本	邊	登	己	治	理
不	遍	跡	許	遅	李
布	部	度	巨	智	梨
ho	he	to		chi	ri

ヌ	ル		ヲ	ワ	カ
ぬ	る		を	わ	か
奴	留	乎	遠	和	加
奴	流	遠	越	王	可
怒	留	於	越	王	賀
努	類		乎		香
農	盧		緒		家
nu	ru		wo	wa	ka

	ヨ		タ	レ	ソ
賀	よ	代	た	れ	う
賀	そ		者	礼	皆
賀	今		者	連	そ
賀	年		為		不
賀	候				況
ga	yo		ta	re	so

ツ	子	ナ		ラ	ム
つ	ね	な		ら	む
津	祢	奈	那	良	牟
津	祢	奈	那	良	牟
津	祢	奈	那	良	牟
津	祢	奈	那	良	牟
tsu	ne	na	na	ra	mu

ヤ	ク	オ	ノ	井	ウ
や	く	た	の	る	う
屋	久	於	乃	井	宇
萩	九	お	能	留	宇
於	區		於	石	雲
	久		怎		雲
	徐		流		雲
ya	ku	o	no	i	u

マ		ケ	フ	コ	エ
ま		け	ふ	こ	え
末	乃	計	ふ	こ	衣
万	美	萬	婦	お	元
満	麻	毛	婦		
毛	麻	衆	富		
万		乃			
ma		ke	fu	ko	e

テ	ア	サ	キ		ユ
て	あ	さ	き		ゆ
て	あ	さ	き	な	ゆ
手	阿	佐	き	奈	由
手	阿	左	幾		遊
手		散	起		
弖		左	支		
te	a	sa	ki		yu

メ	ミ		シ	エ	ヒ
め	み		し	え	ひ
免	美	耳	之	衣	比
女	三	二	志	江	飛
米	美	仁	士	恵	日
馬	美		志	衣	火
	見			濃	比
	三				干
me	mi		shi	e	hi

ん		す	せ	も	は
ン		ス	セ	モ	ハ
		su	se	mo	ha

第一章

㊀さのふ さまでした ㊁さのふ さた ㊂あーたは いかう あーた とれもふ ㊃あーた いかうかと とれもふ ㊄まう すこし のちにたいで なさい ㊅あの をんな

は さくじつ いさまーた ⑦ きのふ いつた
⑧ まゐりませう か ⑨ ごうぢ いきたい と
たもふ ⑩ ごうぢ いきたい と たもつた
⑪ いつ まゐりまーた ⑫ をとひ まゐつた
⑬ けふ かち みつかめに かへらう と
たもふ ⑭ けふ かち みつかめに たぶん

かへる たらう と たもふ ⑮ すぐに もつ
て こい ⑯ いつて もつて こい ⑰ もつて
かへれ ⑱ うちへ もつて いきまーた ⑲
せんこく ひとが きた ⑳ せんこく きた
ひと ㉑ れい いで なのさる か ㉒ あーた れ
いで か ㉓ あーた まゐられまい ㉔

をゝひ　きた　廿 あさつて　いかう　か 廿一
まう　すこ〳〵　のちに　ございませう 廿二
ささをゝひ　いつ　いかう
か 廿三 いきたい　か 廿四 をゝひ　いきたい　と
たもつた 廿五 あゝ〳〵たい　いきたい　と　たもふ
廿六 けふ　かへらう　か 廿七 もつて　いきませふ

か 廿八 あさつて　こい 廿九 あゝ〳〵たもつて　こい
卅 すぐに　もつて　まゐりませうか 卅一
うち へ　かへらう 卅二 さぐつ　うち へ
かへりました 卅三 いかう　ぢや　ない　か
卅四 いかゞ　に　ございませう
第二章

一　さのう　かつた　二　あーた　かつて
こよう　三　すぐ　にかつて　まゐりませう
か　四　かひものに　まゐります　五　はん
を　一かひに　いらさまーた　六　なにを
かつて　きた　七　すぐ　にかひまーた
八　やすい　から　すぐ　にかひまーた

九　あの　ひとの　みせ　は　どこ　で
ございます　十　かはらけ　まち　に　いつけん
ございます　たまもち　にも　いつけん　ござい
ます　十一　みせ　を　だーた　十二　みせ　を　だて
る　十三　みせ　を　だそう　かと　たのふ
十四　さんごよ　に　ごふくや　が　ある　か

㐧十五　このさんごに　ございます　㐧十六
うれない　か　㐧十七　うれません　㐧十八　うれません
㐧十九　いつ　うりまーた　㐧廿　ごうぐ　かつて　きて
くださいまし　㐧廿一　せんごつ　かつて　きて　くれた
㐧廿二　どうぐ　わたくしに　わけて　くださいまし
㐧廿三　わけて　くださらんか　㐧廿四　ゆづって

あげませう　㐧廿五　うの　はんを　たみせ
㐧廿六　ねだんは　いくらだ　㐧廿七　うの　ねだん
では　とても　かはれません　㐧廿八　うの　ねだん
ねだんでは　かへません　㐧廿九　たろうい
たかい　うん　だ　㐧三十　たかく　ございません
㐧三一　いや　とはうもない　たかい　㐧三二　ちつと

もまけん か（芸）いらっしゃいかけねはうう
〳〵あげませんね（苗）なるたけねだんを
はたらきまそう（苗）もつとれまけ（芸）
まかりません（苗）なんだばからい〳〵こと
をいつてゐる（共）まことにたやすう
ございます（苗）そんならまけますが

こんどまたれねがひまうし〳〵ます（平）
まうちつとかんべんしてください（豊）まう
ちつとさばつてたびなさい（豊）
そんなかけねをいつちやこまる（豊）そう
ねぶつちやいけません（豊）まうちつと
れさばりなすつちやいかぶでござい

ようせう(五)ようう ちつと まけたらぞ〳〵だ

第三章

(十一)〳〵せうが まだ ございません(二)〳〵せう

をどうぞ たのみたい(三)どうぞ よい

〳〵せうを さがして ください(四)

みあたり〳〵だい つれて まゐりませう

(五)ひとつきの〳〵やれい はごの くらゐ

やつたら よからう(六)まあ ……りやう

で ごぶんで ございませう(七)なに

をれ ならひ なさる か(八)にほんの

ことばを ならひたい(九)なん ねんばかり

けいこ〳〵て れいで なさるか(十)

いつさくねんの　なつから　けいこ
をります　十　ごろう　を〳〵へて　ください
十一　せんせい　これ　は　ぎう　いふ　いみ
で　ございませう　十二　ぐびき　を　とつて
ください　十三　にいごわやく　の　ぐびき
十四　にほん　の　ぶんぱう〳〵よ　が　なくて

ひどく　ふぐあい　だ　十五　けいこ　を　する
に　ごう　あんばい　に　はぢめたら
よからう　十六　はぢめ　は　どの　けいこ　を
〳〵たら　よからう　十七　まづ　かたかな　と
ひらがな　は　けいこ　の　もと　でござ
います　十八　まづ　いろは　は　たいち　で

ございます　廿　それから　廿一　まづ　かな
を　よく　おぼえて　もう　ずんぐ　と
よめる　やうに　なつたら　それから
ちつと　かんじ　を　おぼえる　が
よからう　と　ぞんじます　廿二　しかし
ながい　あひだ　で　なくつちや　さう
わけ　には　まゐりますまい　廿三　ずんぐ　ねん
けいこ　したら　はなし　が　できる　やう
に　なりませうか　廿四　まづ　はんねん
をろわつたら　ごふぶん　に　できませう
廿五　にはん　の　ことば　を　だれ　に
はつた　廿六　ささ　が　をしへて　くれました

廿四 かたやなはしごはちもんじ
ございますの 廿五 いろはにほへとちりぬるを
ます 廿六 てならひはむづかしいりん
だらう 廿七 なにさほどむづかしいことは
ではない 廿八 べつにてならひどせう
が なくつちやなりますまい 廿九 さう

でもありますまい 三十 てほんをかいて
あげませう 三一 どうもいゝてだ 三二 これ
をうつてください 三三 かみがよく
ございません 三四 がんぴ〜のけいびそばん
三五 ふでをかつてきてください 三六 いく
ほんれいりやうで ございます 三七

すゞりばこ　を　かつて　さて　あげませう

㊎　その　ついで　に　すみ　と　みづ　を

かつて　たいそ　なさい　㊏　はやく　たばねた

のは　なんで　ございます　㊏

なるべく　よく　にたばねられますまい

㊎　なんどき　に　まゐりませう　か　㊐

ごうぐ　から　うたいで　なさい　㊍　まづ

こんにち　は　これ　まで　に　いたして

たさまをそう　㊌　あ　たは　ようが　ござ

います　から　けいこ　を　やすみませう

第四章

㊀　へい　だんなさま　は　はやう　ございます

雑誌會話篇

一 ぼん　どきだ 二 どう　してかう

たそく　なつこ 四 もと　もやくたてる

のく 五 たん　どきまわれ

なさいますを　六 ねーたいはむつま

おさよう 七 ゆびを　つかふゆまもる

八 みづを　あびる 九 てうづをはふ

十 ゆこのまいてゐるかね 十一 まだ

わきやせん 十二 わーて　ございやを

十三 たぶや油　をのーまもう 十四 ふろが

もりまを 十五 てつぷうがたいへんよう

もく　れつた

ぬかさなくつちや

ならない 十六 おもち　そと　いつけや へ

もつて　きのあるせう（七）あんまり　あた
おそざる（六）ゆ　この　まのざ　ぬるい（九）ぬるくて
しやうがわい（八）もつと　あつく　して
なげまさう（廿）ちつと　おひやを　いれませう
この（廿一）てをけ　よいはなをん　むめて　くれろ
（廿二）ぬるい　おそく　この　よけまバ

こいらう（廿三）ゆあがりをは　ぞう　した
（廿四）ゆどのへ　はいる　おいでれさる（廿五）ゆ
かごぜんを　たべよう（廿六）やわらかいて　ぬぐひ
をもつて　こゐ（廿七）そこ　ぢや　いこのない
あらい　はうよ　もよう（廿八）しやぼん　と

こそ〳〵 ございませんㅂけふハどのゝ
をめしまして このㅄなのあそこ〳〵い
ねどころㅄおのもひきをどろ
だらけだよく そこで こいㅅ
ちよつとごのやぶれてゐるㅆどおごが
やぬれてをりまするㅇかく〳〵ろそ

ㅄあそこらしいじやぬをだしませう
このㅆいやさのふねでいつたんゑ
おのなびさあれごがないてゐる
ひろこそこくにたくれいㅍめを
やを破ぶゐだんやもひきはな
なさらぬかこそうㅅよごれた

れをみれ　せんたくや
ませう㊀せんたくやへ
いくらぢ㊁らしやおあつ
んたくものぢやない㊂せん
くやへあつめやうと
ふり

第五章

㊀れを　うるく　もつて　いやがる
だらうね　やく　おない　この㊁なふ
おようで　おございまして㊂百だを　を
あけれ　ぞう　した　もんだ㊃けを
おろさに　祖をおくりました㊄ゆは

まご わかのれん この⑥もう まごさ よ
わきまへ ⑦くつ
ね はらつたを しなくつちやいけない
ぢや なん このまゝいあさねだから
して ごう まく
がく ぞ ⑧ひだちょひをいれろ

そう まて ごぜんいもう でさた
この⑨へい たぶいまそぐ よ⑩ごめくや
ぶ なんまを こうて あるまつた
⑪ん、こちへさせ そう して
と ね あけつぱなしてておくな このぜ
が そいつて ならん⑫ぐあひ この る

そつて　たては　まゐりません　十三　そんなら
だんく　ねんで　なさる　ぐらゐ
それも　ごさいます　ほどさう　れ　もの
だ　十四　それほど　よんで　まゐりませう
十五　せんせい　よいと　おいで　なさる
やうに　さう　いつて　こい　十六　せんせい

いかゞ　ひまる　まゐりまして　おりま
で　ございます　十七　いつも　るそれ　せんせい
だ　そんなら　そ　まで　よび　ふ
いつて　こい　十八　いま　さう　バ　へ　まゐります
たらば　もう　かゞみを　いつて　だ　さう
で　ございます　十九　ごう　ねた　んぢら

廿 せきたんをはげさうしてそで

ゝこのそかをみつまをりてさい

廿一 それぢやいつものれい あちらのだ

廿二 をいこゝもてがみをゝさま ゐ

とこへもつていつてさい 廿三 へんぢ

ゝもらつてまゐりませう この 曲

いえさ〳〵おきでいく 廿五 へんぢを

もらつてこい 廿六 たぶい男れたてがみ

いるをでおざいますたのちおかを

さんにわさ〳〵てまゐりますたこれ

いうけとりでおざいまして 廿七 さゝで

おへんぢをあげるとひますた

卅 たぐいまれ とりこみで ございまして
いづれ あとこのうち おれへんどをいう
まそう と おもうた 卌 おれへんどが
あるりゃもせん 卌一 おへんどを あげまして
おをおく まうしまそう 卌二 それ

ぢやうきへいうちやならぬそして
おちやのしたくしてをけ 卌二 こゝ
さあ ごおいでなさいましたおと
うまうしまそう この 卌三 こちらへ
おとをおまうせそうしてをまそ
とをおくしてある こまろへ

くちを　きく　ものぢやないぞ

(甘)いつも　はゝ〳〵　は　おつれいな　やつだ　(甘)たゞこぼんを　だせ　そう〳〵そ　ひの　きえないやうに　さくらぢみを　いれて　おいて　(共)さくらびみも　もう　はなのひより

ます〳〵た　(苦)そんなら　もりつけざでて　(共)つけぎも　おざいません　これひだぞう　かしたおをで　きへおもちて　おえて　おまひます〳〵た　(先)よく　そうをする　をとおだぎつよ　おまつたやつだ　(辛)そんだ　そうでもまつたまつぴら

ごめんくださいまし〳〵 ㊃ そうひが
くれたからなかりをはけろさう
きてまんやようござりますが
をちつとはやめにだせ ㊃ セレざけ
いもうおざいませんさくやめ〳〵
あがつたあれぞうりでござります〳〵た

㊂ そうこのなくれちないうちさう
いへでよいのよきものれいやつ
だ ㊂ まう〳〵あげようとおもつてひ
わそれてまひもつた きのし とあり
このらいつぷんかりて まねさまのせう この
㊂ そうさるごがよいきのし あと

でござりまするやうにされるちや ならぬ
ぞ

第六章

① さいて くるがいゝ ② さいて こいまするやうに ③ さいて おさまりませう か ④ さいて
まゐりませう ⑤ さいて おいでなさりませう ⑥

いくらきめれても いゝなら ⑦ いくら
さいても いゝなら ⑧ さいて みませう
⑨ さいにやつて おくれさい ⑩ さか
せて ください ⑪ さかさまにして あげませう
か ⑫ まづ さきませんか ⑬ それをえません
⑭ こんれ ことが あると きいた ⑮

ほんぞだ　やらいくら　こゑを　たて
てもきこえませんㇲいえさうゐふ
ことはきこえませんㇳつとめてきこのない
やうまゝをてをるㇴわざときこのない
ㇵをもをるㇵんだけきいた
ㇶわんとうのやうにきこえません

ㇷおきくなをつたらうㇸれまへきい
たらうㇹあればだござにきくはづ
だおまへさうゐふおやをおもちません
ㇺせんきくまゝよやたごまごへん
じおおざをまをせんㇻきくまる
をもをせうㇼなんとこのへんじを

えてください 廿七 まるまるさけて おるさ
まのせう 廿八 さるまるくれひ いたゐまるた
廿九 ちるまるんぐ いるまるた 卅 さる
あゐせれくつちや るこのまません 卅一
ちつとも そんれこゑをうけ
たまはりません 卅二 まだ うけたまはり

ません 卅三 なふ このさうふ こと が
あるやうにうけたまはりました 卅四
うぐひす ですた 卅五 うこのぐひたいと
おもつて ですた 卅六 うぐつて みて
こい 卅七 わたくしも ちつと かして
くれるやうよ ねがひました けれども

なよぶん　かゝて　くれません㊽ちつと
かゝて　くださる　やう　よ　たのみます
㊾おたのみ　ますくまを㊿たのんで
おきかせう(51)たづねます(52)まづ　た
づねて　これいこの(53)たづね　よ　いき
ました(54)たびねて　ください(55)たづね

ましたれそれでもおざいません㊼たづね
ようとおりつたごそのひまごの
なかつた㊽わざくくたづねくだそ
つてはれもだおそれいりました

第七章

㊀いひませう　この㊁まいど　いつた　とほり

三 かねてより
いふとほり 五 まへもうた
とほり 六 おあひなもつたらさう
いつておいてたんれさい 七 さ
つとくるやう さういつてこい
八 いまさういつてまるもの〳〵た

九 そのことをいつてさたの 十
はぐさういつてまる程ません 十一
さういひふいれませう 十二 ごう
ふるけあのわさ〳〵にい
いもれい 十三 さういはぞよおきませう
十四 さうふとさよいまれけるや

なるぬ㊱そんなことをいそぐ
ともいろんだ㊲そんなおや
をいはだといふ〳〵㊳なるたけた
きよさそちぬやうふいひまそ
㊴ひとまよくおをもれよう
おりてゐ㊵ひとれさよる

やうれこそばかりいつてゐけ
かいひと多㊶それはおかされ
いひそこないであつた㊷いひそこれ
います〳〵た㊸をはきやらさう、いへば
よおほた㊹なんといつたこの㊺れんと
いはたつけれ㊻なのかをいつてゐる

廿六

㊱なよ をいはた この㊲くる やう
にいつて さた けれど ござ ーて
もおれいと いひまして㊳ぜひ あーた
これけれが なら ん と さう いつて
こい㊴うそ を いひません㊵ありてい
よいく㊶おちや ごで きたら さう

いく㊶さう だ とふんぢや
れいか㊷さう いつたんぢやない
この㊸さう だ とつたんだらう
ぢやないこの㊹わーやさう
いつてもせうちやまうす
よい㊺さう いつてもせうち

ーますつもい 世 なふ さう いつて
や孔が ぢき せうち だ 共 いえない
おとい ございはやまい 莞 かう
いたたら まのり百せう か 平 そ孔
おと 孔 どう いつあら よかう
孫 豎 いたう やを たもつた けもど

第八章

ほひ まも孔おた 豎 だ孔 のま
で さう いふ こゑ を そんだ 豎
おのつれ 豎 ぜうだん いひ なる
か 豎 まも志 の
ございつた やほり で

① おそーやりまーした　この② さう
たすーやる　けれども　おつ　ふ
さやう　で　ござりまーせん③ おたくや
た　そをまいりまーした④ せん
さく　いそーがしまーした　ところ　ねむたで
たをーやつた　ところ　で　ござい

ます　た⑤ さう　おすまやつて　ごさいま
⑥ さう　おそーやつて　ごさるとも
きそ　よろこびまーせう⑦ おそーや
らんでも　よろしう　ござりまーす
ませう⑧ おはしやつる　やほり
おそーまーした⑨ なる

ほんに さやう
ことに まうし
りまのせん ⑩ だれよ むこのはて
さやう おそ〳〵やるのだぞ
いまに ⑪ そこ〳〵れおやをた
そ〳〵やらぞとをいふん

で ござりません この ⑫ さう お
そちやつて くださるとやう
て そちいりまし ⑬ そう いそ
つ〳〵やる そ いちばんも ござ
いまのせん ⑭ このせう めんかも
さう いぢ ござりません ⑮ ご さう

をゝそくぶさい 六 ござるぞあり
まづいよこちらで とりはか
らいゝまうせう 七 ござるぞご
さたを 八 ねがのひまて 九 もどん
おさゝ以たお酒せう 十 さう

ふおさゝ
に ござるとおやき
もさをまゝ 十一 おそたのた
ゝ笑けすた
ぶんおうもせう
ござまいとまゐりた
ござのおいうち

よ〳〵ぬん　ひろうおかんごの〳〵で

やつちやいのれいい　芸　おんとまうす

〳〵ますた　この　芸一　なんとも　まうす

〳〵ません　で　ござい　まつた　芸二　ござう

を　さう　致　ますされまする　芸三

いちごん　も　ありさされません　芸四

あ〳〵たいきたいと　まうしました

芸五　そんれこと　を　まうしちや

ござる　たいへんだ　芸六　をゝ〳〵

ますたらう　芸七　おゝ〳〵　まうします

ますう　芸八　れ　なんぢ　ありまする　と

程　芸九　う致いはなし　の　ものだ

㊀なに〳〵ますせんか　㊁そのほう〳〵
いうそで　ございまた　㊂またく
波れ〳〵　だりで　ございほと　㊃
まあ先　ごまざ　そみまきん　㊄は
る〳〵　りまきん　㊅おそれ〳〵
なさいまきん　この　㊆ちつと　そか〳〵

れ　ふ系ふ　なりまそう　㊇あの
をとこいまる〳〵　に　ゐらつ
㊈びろ〳〵　の　波れ〳〵　で　ございま
まそ　この　㊉ちつと　はな〳〵　ふ
おいで　れさい　㊋なんぞ　わる〳〵
ろい　はれ〳〵　お　ございません　この

㊱よつぴて　おもしろい
それ〳〵で　おざいまする　㊲のう
いふはれ〳〵　をれ夢ぢさい
またか　㊳むづかしまする　を
それより　ぢまほて　みるなう
おいとむひまそ　㊴ぢつい

それ扨おもしろい
ある　㊵それ〳〵よでまする
ござりまそ　この　㊶まづ　それつきを
で　おざいまする　のはるで
だけ

第九章

㊷いのれいとそ　㊸うそをつ

いて　みろあ　二　それ　か　そそれ　だ
三　おまへ　こそ　うそ　ばかり　うそつきさ　だ　五
あいつ　も　うそ　つい　て　ござる　六
ばからん　七　それ　れ　さよごん
で　ござい　ます　ちやう　さん　八

よ　さう　いひつけました　よ　九
はけて　もゝ　十　れぜ　いひつけた
そほど　ふ　せん　十一　いひつけた
そほど　さ　せん　のかご　ふ
もの　ぢや　十二　この　ごそんれ　こと
を　くれ　やう　に　こびく

だんだんつけて おまゐつた ㊄ だん
ごてみませう ㊅ だいくにぐん
ごませう ㊆ おれだんご まく
ーない おそこのおぎいてん ㊇
わへいつて ～やごつちや いの
ない ㊈ やこのまいまやごはちや

いその卵い ㊇ ひどいお ～やごり
だ ㊈ たごん なるそつちや こゐり
るそ ㊉ だまれ ㊊ さう いそれて
どうも だまつてみそれてん
㊋ とうにん ふやけやつそく
ございま ㊌ まうひとはこのけやい

よそう 苗 いくら かけやつて も
せう ちい〳〵 ~ ~ ~

ものなのく
おそくいでさうせん（艹）そちをそちく
まくんぢやわいで（艸）そうまいくちをだと
ごぞいやせん（艹）そんなこまれ
いひぶちやものごがい

（艹）だれぞさんいだこと
こかへ（艹）まおまへ
そんなことをいひだしたら
しれいよあてまして（艹）つま
らないことをいひけられて
おやさよそうまつた（艹）ちようど

それをいひけるところで
なほ㊐ぶつてはなしかそんな
ことをいひこのはなしをしますん
㊑そのごぶんよおはきかも
ひようだんいつてまつた㊒この
たびいろんなひようばんお

ある㊓おやひようだんだ㊔
それいふせはをめりだ
㊕たいそいきよせつでおざい
ますそう㊖いうふうぬん
をまするもの

第十章

① ごらん なさつた この ② お
ちらん 明 そつて ゆら の
ことに そ ③ ご
らん ふ いま やう と わ て
もつて さん だ ④ まご
はいけん そ ほせん ⑤ あひ

明るく い ぐ ⑥ ぞ こいけん
そ たう ござい ます て ⑥ ぞう
この いいけん を おつけて
ぐさらまし ⑦ ちつと そいけん
⑧ みた よ い れい ⑨ この
に こえよ て ⑩ ある に ある

ほそん ㊉ ふ
も みられまいぞ か ㊈ そらまも
ないと ある ㊇ いつや
ふ みて そもら 姫 が よう
㊆ そがく みどり
まやい ㊅ まいこそ まる

ひを みもろ
れ ものつふ なんび ふ
もこにて みて みを
あれ わと たそふ みを
が こえん けれど うて く
ふ ちがひ ない ㊄ なふそう

ありがたう　ございます　⑥

れど　おほねがひ　申ます

ないと　⑦　めに　みえんけ

せいの　たばは　わど

かけても　⑧　おゑ　な

この　⑨　ほうくてめに　この

ありがたう　ございます　⑩

おめにかゝりたう　ございます

ござりませんか　⑪　ごしんぢう

にちとたゞ　ゑぞうねをねび

ますと　⑫　まちは　けんふつ

ようぢやと　⑬　おもひ

おめにかゝりたう　ございます　⑭

ございます　⑮　ものだ　⑯

ちょっとまちません
（廿四）そのことだっこ
この〳〵まる
よろしゅうございますとおっしゃい
つぎ（廿五）ごんだい
ではこのもちものよろしゅうございますとおっしゃい
（廿六）あのひとにいわんでもよろしゅうございますとおっしゃい
（廿七）〳〵らんでもよろしゅうございますとおっしゃい

ちょっとまちました（廿八）〳〵っぱんこのほうをでちょっとまちました（廿九）あのひとはおごぜんで
（卅）ごごぜんでございますとおっしゃい
（卅一）おせっちゃくがでございますとおっしゃい
わたくしのつたこのほうちゃをこぼしました（卅二）さいほうをもう

りやうた 蔭 わうたく 蔭 お
わうり でござります た の 蔭
ちをと を わけが をのられい
蔭 わけ の をのらない こと 蔭
まご わの経ません こうら も
いもど やく くと ゆさささーて

ください 蔭 をのらん けまや
さう いふ ぶつ 平 ぬらんさぶ
いた をのをれさいまして か
蔭 たべま をのりまをん が と
ねーねべて 海うーあぎやまをう
蔭 ゆねれり ろんね ふと 越

ござ　　ござ
りてをそ　　そのへ
とぞた　　それまをか
へて　あげてそ　この　ぞう
ご　　をねびたい
おかさま　ころ
それまで

えちごのひ　　してをりました
それいおそ　　おきかごれう
けんちがひで　　ございました
おもつてやる　　ございません
ようきまして　　ございました
さみのおび

め〳〵といいのがございません

㊲ わたくしもそれをぞうこのいかにもぞうでございます

㊳ それでもおふたりさまとてもこのまあよろこびでございます

〳〵のみやげをみつくろうて

㊴ ごぞんじよりこのおいそがしいのにこのよふなおかまいをもふしまして

㊵ ごめんなさいへ

㊶ ちつともかまひはしませんがへてあのへてござらんかわりさい

㊷ ひとつごめんこふ

第十一章

ございます㋣ ⑥ こ
みち ぢや ㋐ い
の つきあたり ㋑ ぞ
この みち を ㋒ つ
ごこ へ まがり ㋓ ま
を いく と ㋔ よ

れ い だいぶ
の ㋕ このむ
こ だ ⑧
き あたつたら
ま ⑨ その みち
ど そんに

なりまする ⑩ そ れ で い
そ まはりみち だ の
⑪ おそろしい ま
ぢや ㋖ い この
こちら さ の
だ ㋗ い いたつて

れ
ろ
ん
ぞ い み ち
ん と ⑫ こ れ
み ち い ぞ
こう

ござい ますて それは みれば
うち ばかり で ㊄どう して
も これ は ちのみちを やう
だ ㊅これ から やまみち で
いたって もろう ござい ますて
㊆みち の せまくて とおり

まって ござい ますて ㊇ぢき この
みち を まっすぐ で ございます ㊈
とおりぬいだら うち が みへて
ござりませう ㊉みぎ へ まがる
㊋えど へ とおりぬいだら

のやのよ
みちへごぶさいますやう この㊐あり
まもそそやかいだう なこのせんだう
とものひますと㊑そこねのせ
そのまゝへう ごぶさ
いまのやう さねえまあ

てぶさまに
らるれこと でそ かう㊒おそ
ろゝいぞうも みち ぶわる
㊓あそこに みづ がたまつて
るからやられるい㊔にやん
れいもを いつちれく

りにあるやつ（廿）さやう
いちをもさんごろくて
うをいひまするとそのいつてろくづけんのこと
いつけんにはなれもろくしやく

（卅）これはうれしいちもごせんぶつやくでそれにまひやくはちんぜうでなんのいちりにまばあ（卅一）

なのこ のり
に あらりませう 廿 めるかぎ ゑ
この ちまう ど あらりませう
この 廿 いえ わるー れん
ぜう で も ちづけん ちごひ
やのも 廿 どちら ぎ のびて ね

ませう 廿 あれた のはう 廿
ゆふべ あめ ぎ わるく れ
いうん よ みち のう ふちた あらた
つた 廿 こんもち わらいれひ
と のおやい こと 廿 みな
ぢつの へ さんけい に ろた

ん　だらう　㊐　ゐるそ　そう　の
を　ちまちまい　㊑　けふ　も　だつ
さま　ろ　めいまいち　だから
そこ〳〵　さんけい　きた　ん
だらう　㊒　あんなない　を　〳〵て
あげよう　ま　㊓　ぞうぞ　みち

を　を〳〵て　ください　㊔　これ　の
さん　てう　さま　の　ところ
よ　ひざり　〳〵　まがる　よこそう
が　ある　が　そこ　〳〵　まいりて
それ　から　まつ　すぐ　〳〵　まがる
て　もらつ　ぐ　に　いくんで

㊂そんなら　このとをれ
らんで　をりてまた㊃どいたりく
れ　どかん　この㊄おうらいく
㊅ままへ　すれ㊆まつぴら　ご
めん　なさい㊇どうぞ　そこ〳〵
とをして　ください㊈みちのひ

だりごは　よほ〳〵みせ　ごの　ある
が　その　そば
を　ゆく　とよ　れそう　そも
まって㊉あの　もう　いぬ〳〵ん
ちく　で　おうらいぞあ　だ　さう
だ㊋だうり　で　こうに　かを

ぎ〳〵　ごの　ゆ〳〵つて　みまのまと ㊃

やうやく　わこ〳〵へ　でた

ふね　の　でる　うち　ちとや

もんで　まわりまする ㊄ あく〳〵あ〳〵

ごの　ぎいぶん　くろびれました

第十二章

㊀ をゝ　もんやうの　おとごが

まる　ぴゝ　ふ　どつち　おはう

この　ちら ㊁ たや

ぴゝまた ㊂ そのゝ〳〵　さう　だ

㊃ 〳〵んめいま〳〵　のふうがあそ

みえやうまて ㊄ まあ　あの　こん　な

〜んるい　お
やけれけりや
ぎっちれ
⑦こうぜい
なっちらい
なっちの
ぐる　おと
ありまして

なるが　どっこの
いっ　お　⑥めぜい
まっ　へ　ぬまして
だ　、のっち
っ　て　あん
まい

⑧これ　あぶれい　き　を　つけ
ろ　あわなくっ　て　ひのみ　やら
おっこもる　と　いけい　で　⑨もし
まのいっ　ら　くっ　ぶ　だ
え　⑩ええ　あっ　ごっ　たのわや
しっさ　から　で　た　さう　で　で

ございまする ㊉ん、さう、のえ ㊊
すぐ ひけも ごがござらぬさ
うで あとひを ふってとる
㊋なんと みあひ ゆごろわ
ごむ へいそ みよう ぢや
ないか ぞう だ ㊌こい まゐり

まゐらう さあ ㊍よさま
こぞう かごむおり をなされい
この ちちん しった
㊎ろく いまくしい ざこを の
もなを ごがされた ㊐そこに
ある のを ゆまりに おそ

きの　ゆうさい　㊅　ちっと　しづかよ

いのう　あまりさ　のけたら　いきが

ごが　きれる　㊆　さぞ　お　さわぎ

ゆきつたらう　きのふ　ごぶれ

んでおめでたう　ござりまする

㊇　なるほど　この　どうを　さうぐ

ちい　こうて　ござりまして　れ　たく

いまあ　かざるさ　で　きのふ

㊇　おを　たいそう　やけた　ちやう

もう　したびよ　ゆかたを　㊈　まつ

あちら　へ　とびも　ごの　ちやた　㊉

なのの　どざうぐ　れいく

ぞい　ろ　うち
ひのふ　ごの　めづる
ばれん　のまくら　ひも　ゐるぐみ
だらう　(甘)あま　いもめぐみ　さ
(共)いゝ　ところ　へけ〳〵ちを
とつた　(廿)あの　みまもりを　れ

ん　とふ　ひと　(卅)たいそう
まつぱな　ところばさんを　か
ぶつて　ゐる　(共)いや　あんさい
ご　ふしやう　ゐをつたさうだ
ぢお　さのとく　れ〳〵お
けぢも　なく　て　(共)つえそれ

でも　ちよだ〳〵　も　みんな
でま〳〵た　このら　れ　ばのり　お
〳〵あつせ　で　ございまさ　れ
も　まあ　このやうた　けたやう
のおとで　ござうる　やうそう
わ〳〵らい　だ〳〵さ　りのまで

やけて　〳〵まひま〳〵も　おやそれ
も　ゆうんだ　ざ　さられん　で　ござ
いはゝた　まだ　わたちついた　やうでも
こんれ　とさ　にい　あわてるも
のさ　まそそ　うびこのね　つびび
この　称　まいい　はけび　で　よぐ

にひつけごの
(甚)ん　そそやいくみだ
(共)もう〳〵めりをうつから
あんどだかアもう〳〵(甚)ここ
もよるところごあるから
れこうおまるまでしまし

まもと(悉)だんれくろぐゝれぐう
でごぶ〳〵もたた(光)まあそん
もんよやいたいくさそれ
でもそびのごおよくは
そういたやうこそあのく
らゐおことでよんだご

それで おけりや この ごと
だ ものどんな ふ やける の
しれた ものぢや ねい 平
そびれもの ねんぞ いてくなく
のだ〳〵だ〳〵いぜいめを
かけて おきたい ものさ 三それ

でもたび〳〵むんをい
つてうるさいぢやありません
この 豆 いんえ なふ〳〵ひどやう
れもときやくにたつも
しおとをむだのり だ 豆 あの
つんそぞよくやける とを

ろいろなりませう　㊂　さ
ねえ　かうごまをもちのそばで
ひらくくと　やけたこの〳〵
れがい　㊄　あのときにいけ
ごまんごたいそう〳〵あつた
さう　でせ　㊅　よく〳〵きをつ

けてひのもとをよくごらんなさ
がいとなんれことがある
で　㊆　そうひぐがいぶんのうち
ごがいごしいぞもそうして
ひらもけつしてだされい
やうにそなはけつまや　㊇　ちがは

平　もいよく　いひつけませう　ぬ
つだんやかみだれのおと
うめ〳〵をきつと　〳〵めて
やるむこのいろぞおやのいぐ
もだれこのわるれて移た
さま〳〵多こが

第十三章　草

一　をさきにこづゐを　こう〳〵へ
ようとおもふのぞかど
く〳〵んも此でき〳〵してお
此ろの形をせわしてを
母うに此たいものだこの二つい

それ　いまおもへば　おろかなる
ことでございました　さほどまで
みつせう　㊁　おのあそびを
おたのしみたい　ぼくをつれて
ゆきたい　これおれのもの
でおまへん　こやつときみを

おこ　ごらんの　とおり　ぼくは
で　まのかはりおやくにた
たちまして　こが　㊂　そんなら　お
まへ　このうけまんに　なるか
㊄　いえ　うけまんいづよ
たゝこの　ものの　ぶざまを

六 そんなの程
のとおろ ハいも 鈴に〳〵
うぉ まゐう その かのよつ
き〳〵 ざうよう ゆと〳〵 さん
ぶ ぼ〳〵 七 そ れ も ありがあう
おぎいまた ふけやう い

とぼ〳〵 ぐさいまして 八 さう
そ おうおう ちぐろ に〳〵 ふう
そのときとうかへとして
はん ねん 鈴 ふうまん
を わさう ひら 九 そんれら
なんぶん よう〳〵 だんで はゐ

なぜ　こんなもの　十あいて
にいさまが　おいでなさる
ぢや　ゐい　この　そこ　そこ
はゐ〳〵　なさい　士いえ　さんたち
いせう〳〵　やうございます　うち
士そんなら　そのうち

にはゐ〳〵　ゐ　おいで　吉ありがう
さう　おぢさんが　さんづまさ
あくがりまさう　士爺い　おめんく
ございます　わたくしは　いせん
だつて　おめにかゝりに
まつた　さやうけで　ござゐ

ゐた　たゞ山面
ゐる程まゝた㊄ん　きう
ゐる人　ばかく
ばもち　へ　なが
ぬてこはうもの
から　ぞこ　ぞ
ゐる人　ね　ね

こゞね　まゝ〳〵ゐた㊆ん
ぞいぬん　よ　を
えそ　くまる
に　ものゝ
は　ま㊇
ぎいゐた㊈ん、

おのれ　おお　那ん　で　そ　ち
んぞう　ける
ま　廿　かー　ち　油　理　て　ち　も　廿　やぬん
ぬ　ぞ　ち　あ　ま　り　なけない　やう
ふ　ち　る　が　ま　く　て　を　ー　ぬ　ふ
この　ように　が　あ　て　ばれ　ろ　て

那　ま　ぬ　い　ま　そ　ち　を　は　な　つ　と　ち
と　ぬ　ま　て　ぬ　ま　ぶ　つ　廿　ぶ　つ
ち　る　も　ま　ー　ち　ぶ　ん　ぬ　ま　ぶ　ち　ぬ　れ
ー　ち　つ　た　ふ　ん　よ　う　ま　へ　ん
で　油　ち　ん　廿　ま　ん　よ　う　ま　ぬ
と　ぬ　は　ち　ぬ　ま　ん　こ　ち　第　や　へ

の津て 築くそく さそる こゞく

(苗) おれ おもち ゆ計 きんえいて

屋 きつて 百ぼ もや 弥て

な ゆ法て おい (苣) つゐ ゆゞき む

ゆゞ この法て て

百おもませう (英)

きくく さふ もや久 ぼの和 (苾)

屋ゐ こぼひよ 我 この歌て きん

ご下ー名 (英) 拾い ぶくくく

くく くて やそん だ

百には の 百ぐご を さる

おゝ (苾) ゆんなら あゞつま も

ご ふゐまし 浦きつ (苾) そ和

ぢや たゞまア 多羅う がぐう
おの のさうね 引 く毎 のそを
もえ ほちつて くるれ 世 こいは
いでに いしぐ〳〵 れお
けをも なちひてせう この 世
つぎはぐう 免 お汁 をた

とされて 多羅う 多羅う ものかそれ
もおね うきさ でも をちぬやう
にきを はけろ 世 やう〳〵
そうど をちひまう 廿
者をど 引 しめて おんこぎで
あを 多羅う 赤 おけれい やち 廿五 だ

ん那　かはて
を　ろ美ぉんで　お事ぅせう　この
どろ　いゐ〜ものをう　共　いもく
おれ　ふ　ろかくて　も
ぢや　那い　この　き　ち　ちのない
地　どろ　〜て　いく　このきつぷを

和ぅ事の第那ぁ　共　なる程度　この
て　ろ　まゐ　ま屋那い　が屋む
那　由　なく
ち　ち　せを　ち　屋ま由
那ろて　ふ　ち　ま　ま　お
第十四章

(一)多葡萄 さう〳〵 お孫
ござ 〳〵 たい おやぢ ぶご
さ 美濃区 (二)れんだ (三)おやぢ ご
茶 〳〵びやく だ を 庵 〳〵 そ
ある那古 ぶ 〳〵 そが 美 ご 油
ある程 多 〳〵 ぶご 〳〵 ぜ お

あ ち お 毛 来 を いくあ ぶ た う
おぶ ぶい て ま そ (三)そ 油 へ お 在 ぶ
た 金 く たびく わばら ぬ お
あ て た 〳〵 お を いぼ を あ 弟 び
ふ 俗 毎 いく ん ぶご 多 在 〳〵 (五)ぶご
いく 油 〳〵 〳〵 お 着 た う 俗 お

さ仔癪ゝて ⑥ ぼんやら 考が実 我
実際家 ⑦ まる
おやこ〳〵 ゝ神 ゝまひました ⑧ そ我
美俗 字典 ご の あらい我た ⑨
ゝまを なを は法師ゆり理てまゝて
いはばまを ゝ てまゝ〳〵 あげてまん

⑩ 万の ぼんこの ゝまで ゝを ゝる
ゝ〳〵 たゝ で毋 ゝる ご の
⑪ をい ゝまゝまを ちはゝを はれ
まを ゝを ご ある ゝら ゝて
へゝる が ゝく ⑫ 薗仔 なふお
ゝまゝ で ござゝ ゝ ⑬ 他の は

おそで　それは　この　家やく
にげて　こんど　うちより
きそなが　城　きそ　留守　おりて　だ
やまろで　花　城　勇気　だ
久しぶりや　あらば　ゆうべ　きの
どく　だ　この　家　ふる　ゆう

ゆうべ　城　やら　ゆうべ　久しぶりや　ゆうべ　ん
㊤　さやう　御　おざいます　か
あの　ござ　義　弟　妻　妙
妙　おい　あそ　で　おざいます　㊦
ゆや　あの　ござ　やう　ゆうべ　ゆう　だ　おく
で　そ　おい　ゆう　ゆうべ　いま　お　の

うまく　ゆとり
なるべく　ねて　この　御案　そほの
をおして　あるく　ぐち　を
きはふ　おいり　だいり　も
いふ　さく　ゐて
いふ　まで　御次　や　おもきにた
そのり　夏次　㊧　御児　ふち　ゐ

かつて　で　ほま　を　だ　数　こと
だ　の　晨　おく　ろん　ゐ　の
も　ある　けま　ど　そ　れ　も　か
つて　よ　お　宿　ぱ　ゐい　㊨　いろ
あゐい　おぱし　ぱ　ゐい
おまし　を　か　ぱ　の
あとがき　こと　で

ざざいもん　九　おれ　そらそらって
えい　ゆあべ　ごこ〳〵ろった　十
どつぼ〳〵　ざ　もあり　いいもの〳〵
ろきん　十一　そのれいは　まさ　ごある
もの　この　ぜうが　なつて　よ
んだ　けれぞ　魚やふ　あれ

地面　ないの　十二　ついれるほぐ
あの　そさ　も
るて　で　おざいます〳〵た　十三　などの以面
やは　もつ　に　ぐ〳〵して
把　ご　ある　もの　香　せんだつて　か
ら　いけあ　も　たび〳〵　もつ　お

ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　こと　を　まこ〜

も　さこのまで　なのまつきへ〜もどん

を　あげむく　と　ば　ぬやさい

やは　だ　曲　とんだ　こゝ　おまて

やいてゐる　どく〜　して　ねみく

こゝそい　てゐる〜あげてをん

曲　いまゝ　ぬ　ぬ　のまへ　ぬ　ぬ

ねば　いつたあ　ぢや　ねい　この　ぬ

あ　さゝこて　ぬ　ぬ　ぬ　ぬれ　その

よ　ろち　を　ねえ　と　ばは　ぬ

ぎる　あつ　こゝまにん　ふ　だあ

ぬる　のら　ぬやろ　ろん　ぬ

おい　㊤　てをおやこ
ぎ　そろ〳〵　おぎやまた　こ
れ　このら　ぎや　ね　はなけてた
この花　おぎやぎ　は　ぞ〳〵　はや
ごめん　れをつて　おはふお
そ花　以程下　おぎいはを

㊤　もを〳〵以　そをん　だ　れん　と
そうそ　そ　おんぎ　い　せうちい
でできれい　このら　もやえ　いそよ
以　そう　から　だを　はもお
はた　ご　はあ　くく　とおをつて
ひん　ぎ　を　くをつて　そた　ぎ

もう　もちろん　もたくさん
ホい　ものの　廿　ものの　た
ひと　で　おぎいてた　のホ
およう　で　ごぜ以後　廿　さやう
を　ほのの　そ　れいの　あ
ほ　ともちろん　あとを　も

こ〳〵　ぞんじよう　この　ある　ところ
いふこと　を　ふむ　ごさう　を　おりふ
廿　なんぞ　ぬて　ところ　ども　い
こ〳〵　もた　この　卅　もぐ　先　い
お函　きんびやく　ごもつた　この　おもく
ぞ〳〵ちやう　して　以後　いる　お

志満和ろ志つ
ゐもゝて　ざゝ蛙　そぼれ　きんとゝ
ゐもゝ志ろせゝ　あん　を　ぢゝきん